

淨瑠璃大系圖

上



浪華竹本筆太夫小鷹島翁考
平安狂言堂近松春翠子訂



浄瑠璃大系圖

全 部

三 冊

浪華書肆

高橋興文堂梓



浄瑠璃大系圖序

人生ふがうにて知者なり師の教導を
得て而後知是哉以古今の弟子七人
去る少乃影を不踏の紙を伴ふ小鷹島
世上に浄瑠璃者流又を三結家木乃末
由然も不并軍多を歎た浄瑠璃三結
乃系番成著さん事は僕小鷹島己

亦多年此宿志あり旅名位亦不堪
翁と僕と志を合し緒家の傳紀を擇り
遠く尋ね考て此冊子と編淨瑠
瑠大京岡と頸を是る君に軍小師乃
傳來え祖の苦を知らせま一乃恩を
報むる便し具をは道執心の今に森
覺を慰むる程ともあふんは先賢

公乃々乞後乃君子小齋翁と老僕が
微意を掛け綴錯を正し人閑るを
補ひ後乃大幸何り是れ如ん周る
一言を巻端に述る序辞とまゐる事爾

天保十三
寅年仲殊日

近松狂言堂誌



當流元祖
竹本筑後掾
藤原博教
道喜入道

淨瑠璃悲用祖
小野於通女

五世園
周山玄

淨瑠璃作者元祖
迎松門左三門
藤原信盛



淨瑠璃元祖
太夫三弦
角澤檢校

東流元祖
豊竹越前掾
藤原重盛

當流三弦元祖
竹沢権右三郎



一都々景縉のあふあふ筋の混雜哉いゝが友吉の師の門人をして
来りわたり新しき人仕門人を生ふかぬといふ人豈をたゞて新古の
以烈前後示あまゝ一様怪しむものやうあるれ

一氣縋けんふ乃内うち當時とき在あ世よの昨きのうの口くち人ひと乃また後あと成なり時とき糸紙いとじをを残のこすハハ返かへテ

一多人数の事ゆへ稀ゆへは代前後の程も有る又遠近の事
 あり名のまねごとを名前よりするもの有る其を考訂
 するものあり又あるなりとるものあり

淨瑠璃大景圖卷之上

淨瑠璃惣廬祖

小野於通女

竹本筆太夫小鷹翁考
近松狂言堂春翠子訂

生國姓氏^{きこくせいし}祥^{さむ}あひ初織田信長公の侍女より後小豊太
閤^{あひ}乃侍女より博學秀老のきこえ有なり川北政所高
臺院殿の御所より三匹矢矧の長者の女^{むすめ}淨瑠璃女が
源の牛若丸を夢想せし始末をいひて生殿十二段の物
語と著と一名淨瑠璃物語といふ此淨瑠璃女三日月の

美作乃音子なる友郎と浄瑠璃女と名付し此因なり
際乃十二神持小衣十二段と述作をも謂り北政所其父乃
秀なる感いぬ琵琶法師と召れ是あつて一章に付せて
かゝせむ其頃へいまだ三弦合せといふ更にかゝる右のより
あゝ扇の音とておし拍子とてつゝかゝりたり其後泉
州堀乃盲の角沢掾校もいまだ三弦合せて是をうり
より廿六浄瑠璃節といひやうや左此曲の惣名とあつて
此の通と秀乃乃上時家流の能書あゝ其以女筆乃
冠とてと名上野國利根川乃北なる本村何し寺小左
於通女の墓あり寺号并法名出で考へ
。右の義とていふ小野於通を浄瑠璃の惣先祖と作ふ人

浄瑠璃并三絃惣元祖

角津掾校

泉及堀の盲人豊太閤の政所乃令か

より於通の述作乃とて十二段の物

語然三弦合せとてかゝり初む續く。大職冠。八島。高

館等の唱あつて一章と付てかゝりいまだ浄瑠璃に

といひあつてより惣名とあるたゞて山姥のものを依り

物居てもつて素と付て三弦合せを浄瑠璃なりといふ

目貫屋長三郎 京都東洞院三条上町小住と角沢氏の

門人となりて浄瑠璃とてかゝり弘め自今も。お巡見物を傳つと

い浄瑠璃を新作してかゝり其余一代乃中後乃新作

して廿六がとて弘む

浄瑠璃上

江戸両邊元組

虎屋薩摩太夫

大坂の虎又堀の人ともいふ初め薩摩
次々右衛門とより角沢は浄ろを習

ひ自か又色くつし章を夫一流をかりかを後中豊太
の台余と慕り浪令も人形振り芝居奥の御櫓目付と
して二座の太夫とあり色く新浄瑠璃をかよりかを天正年
中は戸へも大流行し門人あまたつた繁昌して浄ろが
いより世にふる老年中及び別髪して浄雲入道と号せり
今小江戸を表ふ人まづいふまづこれなり此薩摩
ちまの送流なり

油屋茂兵衛

慶安の以乃人
江戸住 各人なり

鳥屋次郎吉

江戸住

四郎興吉

江戸住

虎屋丹後太夫

江戸住 保より慶安の以
以上四人を四天王といふ人も各人なり

虎屋丹波太夫

江戸住

虎屋源太夫

江戸住 京都両邊元組

虎屋長門太夫

江戸住

江戸半太夫

江戸住 當時江戸へ送流あり
江戸半太夫

坂本河東太夫

江戸住河東太夫
送流あり

虎屋喜太夫

虎屋相摸太夫

虎屋越後太夫

近江太夫語齋

江戸住送流あり

江戸肥前太夫

同上

江戸外記太夫

同上送流あり

江戸土佐太夫

江戸住

虎屋永閑太夫

江戸住

江戸太夫送流
追考

京都惣用發

六字南無左門

文録年中女
傳紀録あり
追考後編あり

説經与八郎

説經墓太夫

説經林清

絶経林故

絶経林達

山本角太夫

系族の人一流とありて角太夫と云ふ
正保貞和の以乃人山本太依縁と聖賢す

山本長太夫

正保貞和の以乃人一流とありて云ふ

伊勢嶋宮内

宇治嘉太夫

紀元の人流妙曲ありて其故あり後小
伊勢島氏の門人となりて一流とありて云ふ
四条の坊内小僧と常々云ふ其の流を後聖賢として云ふ
加賀縁系好澄と改名門人小島松氏世田氏ありて云ふ

貞と云ふも當時は流絶ありて其故ありて云ふ
順妙寺の墓あり

岡本文弥

一流をかりて後には文弥と云ふ

都万太夫

後小都越後縁と改名

都太夫一仲

菅野傳弥改

松本治太夫

宮古路國太夫

都半仲改に戸なり一流とありて云ふ
菅野傳弥改と改め後縁と云ふ

富水豊前太夫

享和文化の以乃人一流をかりて云ふ
菅野傳弥改と改め後縁と云ふ

岡本阿波太夫

後鳴戸太夫と改

鶴賀若狹椽

一流をかり出す世小新内フシといふ

鶴賀新内

鶴賀若狹太夫

○初て文弥一仲を後新内富本後本とも
除才の系譜追る考に後分るゆゑと

鶴賀繁太夫

江戸新といふ若椽を其の未分あつた大坂、
ゆゑ新内ブシを弘む

大坂兩發元祖

井上市郎兵衛

生必未詳流小妙曲の名とゆへう流の
浄よりとまひく一流をかり出す世小

ハリマフとつゝは人のフシかり寛文の以乃人後受領と井上
播磨掾系要榮と改名と

石屋三右衛門

貞享三年清水理をまゝといふ行分

尾崎権右衛門

座を流と義と後で因とて義をま
づ三弦の之組とわゝる角沢氏の沢乃字とより竹沢氏と改
むに人々三弦の部ふ記すと

清水理兵衛

天王寺村徳屋理を流といふ中井天神
社の傍に住し凡流と好む其の陽を流

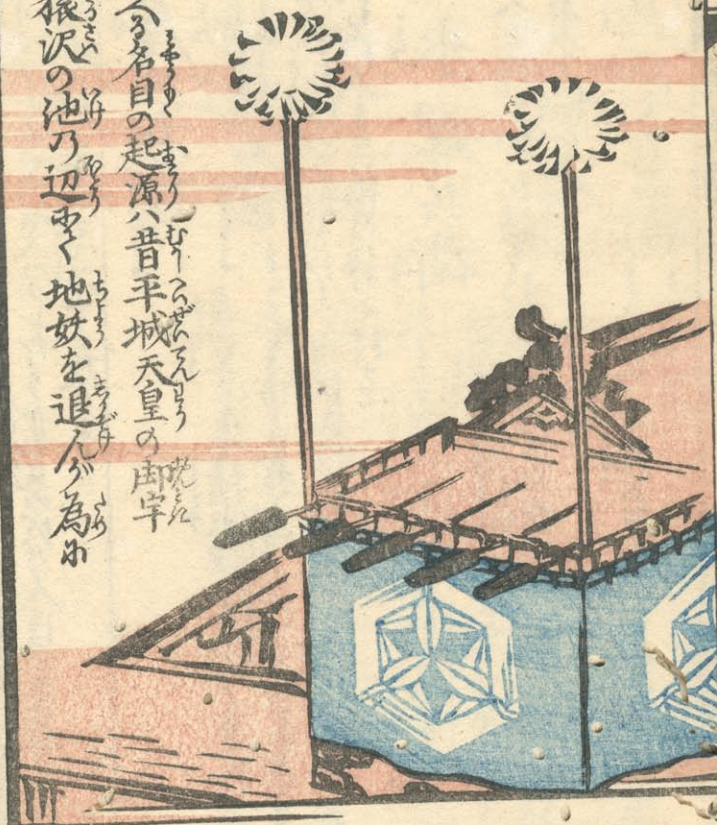
又き浄を理を好むとわゝる芝居も出勲と名へ更其に今播
磨と稱と延宝年中のりなり

道具屋吉右衛門

大坂の人一流をかり出すとゆへに大坂
浄よりとまひく一流をかり出す世小

浄景図止

芝居と云ふ名目の起源ハ昔平城天皇の御宇
 南都猿沢の池の辺に地奴を退け給ふ



薪と積ぐ是を焼興福寺の南門の前
 芝の上で申樂を舞せし是薪の能は温湯
 諸人芝居上居能を見物し遺風をのり
 能角能歌舞妓操とも皆芝居と称せし
 何う歌舞妓操の成芝居と呼更とわさる

槽と云ふ豊太閤肥前名護屋に御在陣の砌
 御免許ありと云槽小工梵天ハ是晴天を
 梵天帝釈祈る幣串ありと古老言傳り

表具屋又四郎

大坂の人一流となり世に表具屋をブ

井上市郎兵衛

當流え祖

竹本義太夫

揚及天王寺村城越町農家五世傳といふ
信あり理を傳門人となりて昼夜禮を志
是丹絨を袖で修めせり友をわたりて後あり理を志と改名し宇治
赤きまといはせりなりけり人天徳の美声ありて赤きまといは
理を志し押さぬのつづき赤きまといはせり友をわたりて後あり理を志と改名し宇治
座を傳け理を志と傳ひて赤きまといはせり友をわたりて後あり理を志と改名し宇治
小太鼓り衆といはせり後大坂へ入るなり赤きまといはせり友をわたりて後あり理を志と改名し宇治
縁ありて赤きまといはせり友をわたりて後あり理を志と改名し宇治
めり竹本座の橋をよる是貞享二年の夏にされけり

内通理を夫

陸奥茂を夫

多川源を夫

竹本頼母を夫

人義を志し淨る理のえ祖といふ元禄十四年己五月
勅許を傳へ竹本筑後様並系傳教と改むされたり西
のき居と筑後のき居と稱し正徳四年辛九月十日
四少ありて寂を法名道長居士といふ天王寺の南無観音
堂あり

門人合羽伊を志し後小坂井いふと改
めり外の教ふなりて記す

正徳五年乙未十一月由緒節淨を
り時九仙山の燈をかり初む

竹本難波太夫

二井彦太夫

東流久組

豊竹若太夫

大坂崎屋内義井屋何来元祖義太夫
門人となり井中定女より元禄十五
年大坂城を落とす居ておめを井中定女と改名し一統と信
仰し擧とて寺を三井興りてけいを本組の名人ありて
も多声なり二五とも井中抄の舞文三の声なりく中人感ぜ
ざるのやうなりし宗昔より若々をふかの二カンの音のとがれ
る希なりといふ享保二戌年正月を井上野少根を後
と受給改を日十六年亥十月十日根系京都より
おめなりとも移居延へ召し孫虎のゆゑに淨を程とてり

睿廟小位人 櫻岡院御感 早 勅件有るを
井越前少根系を安と受領とけ文を元禄倫との
奥小塵深敷と御書後揚り紙のなり何系の大
納言承之といきし兩卿の山名前あり越前根今の系を
主の女居よりけねの御倫音鳥帽子系東と白本の
其小系と系の上殿小かざりて其其前あり受領の税依
淨を程をかき口キ中井和泉より三松井は系四郎人
延享三年正月十六日十五才あり一世一代淨を程とてむ系
系良ありて日明和元申年九月十三日十四才ありて
を法系ハ一音院真覚隆信日重居士と号して天皇寺所
乃係小古墳あり〇〇系と中の巻小別記と

若竹政太夫

二代目義太夫

大坂の人紅屋長四郎といふ又申紅屋とも
正徳二年若竹政を文と改名して順通

義孝の御子なりて安永中入道とて後中納言と改氏
とて之祖能後祿死去の御孫言小修とて二代目義孝と改
名とて享保二十年乙卯十一月愛領竹中掃部祿後系
義孝と改名親條淨とて知事とて三任崔氏女と即
延享元年申子年七月廿五日死去仍年五十四天玉寺
玉恩寺小葬る法名不國院乾外孤雲居士と号と

豊竹万右夫

竹本彦右夫

北國丹右夫

竹本文右夫

長嶋重太夫

竹本喜太夫

竹本大和太夫

竹本幾世太夫

竹本政太夫

竹本錦太夫

竹本紋太夫

二代目義孝太夫二代目義孝太夫の御子なり
後小愛領とて大和掃と改名門人奥の御子と

二代目なり大改さるもの人十を掃とて小修と
十を掃政を夫とてさる改を夫とて云

綿武と云

後小上祿を夫と改名

竹本友太夫

竹本土佐太夫

是より下三代目政を夫門人なり

幼代

竹本漆太夫

竹本組太夫

唐堂のあ

竹本政太夫

三代目之中太夫改任宅極所又極所政を奉
り中興の名なり

順四軒

此等所四目ふ位とさき政を夫のあ
り素人あれよ名なり

竹本志賀太夫

京

竹本住太夫

江戸

竹本紋太夫

村屋
倉太夫改

竹本男徳齋

竹本綱太夫

幼代
新ろじと

竹本咲太夫

男徳門人
金と

竹本浪太夫

是より下住太夫門人
京より

竹本半太夫

京

竹本住太夫

組を夫改

竹本中太夫

是より下協町政太夫門人なり
二代目新町中吉と云

竹本政太夫

四代目之和太夫改氏太夫又改名
義助と云

竹本播磨禄

加太夫改土佐太夫又改年中要領と云
改名

竹本大和太夫

是より下播磨禄門人
伴達太夫改

竹本大隅太夫

三根太夫改

竹本土佐太夫

吉太夫改

竹本住太夫

富太夫改高麗太夫又改之吉盲ふ
あり番本より出づと云

竹本越太夫

岸太夫改筆の太夫又改名

竹本嶋太夫

文字太夫改

竹本千賀太夫

竹本土佐太夫

拙太夫改三輪太夫又改名

竹本佐渡太夫

是より下筆の越太夫門人

竹本宇太夫

洋書図上

竹本音羽太夫

是より音羽太夫門人

竹本音太夫

竹本駒木太夫

是より音羽太夫門人

竹本鯨太夫

竹本千里太夫

是より三振太夫門人

竹本大和太夫

竹本大嶋太夫

竹本富太夫

洋書図上

洋書図上

竹本氏太夫

是より以下四目氏改太夫門人

竹本きぬ縮太夫

竹本くもと内通太夫

和太夫改頼太夫又改
金太夫と云

竹本くもと組太夫

當司改藍玉と云

竹本きぬ勢見太夫

竹本きぬ惠見太夫

是より以下勢見太夫門人

竹本きぬ宮太夫

竹本きぬ泉太夫

竹本きぬ盛太夫



竹本義太夫いまだ清水理太夫とくへ頂藝州宮嶋下下芝居興行
 廿日間暇ある毎小巖嶋明神(あまの)糸巻(いとまき)一巻道(いっまいちみち)後(ご)選(せん)せざる多(おほ)と
 深く祈(いの)る小(こ)其(その)信心(しんじん)を明神(あまの)感納(かんだく)まじくせん或夜(あるや)糸巻(いとまき)一巻(いっまいちまき)
 睡(ま)い内(うち)天童(てんどう)一巻(いっまいちまき)の油(あぶら)乃(の)物(もの)と持出(も)り理太夫(りたふ)授(ま)ふと黙(もく)り
 まゝ是(こ)より藝道(げいどう)大(おほ)上(うへ)達(た)天下(てんか)の名(な)を
 称(な)せしれ遂(つい)小(こ)筑後(ちくご)縁(ゆかり)と受領(うけりやう)すも
 ひと小(こ)信心(しんじん)の徳(とく)と謂(い)ふ

竹本當磨^{とま}太夫

是より下歴を組太夫人

竹本當熊^{とく}太夫

竹本玉^{とま}太夫

金玉改

竹本當勇^{とゆう}太夫

竹本伊勢^{いせ}太夫

竹本加^か太夫

竹本漆^{しきめ}太夫

是より初代漆太夫人に二代目

竹本漆太夫

三根太夫改ハ多傷と云

三代目之梶太夫改

竹本是^{これ}太夫

京

竹本彦^{ひこ}太夫

竹本緞^{きぬ}太夫

是より京是太夫人人
京大茂改

竹本中^{なか}太夫

式太夫改

竹本式^{しき}太夫

京

岡島屋と云

竹本藏太夫

かしこ
京

竹本政太夫

是より下中太夫門人
五代目なり重太夫改

竹本中太夫

江戸
政子太夫改

竹本中太夫

佐賀太夫改

竹本式太夫

河内

竹本泉太夫

是より下佐賀中太夫門人

竹本光太夫

竹本文太夫

竹本谷太夫

是より下五代目重政太夫門人

竹本佐賀太夫

竹本信太夫

竹本頼母太夫

竹本琴太夫

竹本美能太夫

是より下佐賀太夫門人

竹本緑太夫

竹本握太夫

三代目漆太夫門人菅太夫改

竹本越太夫

初代之三代目漆太夫門人
柳屋と云

竹本越太夫

是より初代越太夫門人
二代目之江戸要太夫改

竹本武太夫

後小越太夫と改

竹本伊佐太夫

竹本文字太夫

武太夫門人光太夫改

竹本越太夫

武太夫門人 和太夫改武太夫又改

竹本峯太夫

二代目深太夫門人

淨瑠璃景圖卷之上畢

